

秋風菴文集
抄

特別
又4
4899
13



又4
6899
13

秋風菴文集
抄

24
4899
13



秋風菴文集

引 印

余不解諧歌，秋風菴之有妙諧詣於此間，
之先人之言矣。昔翁截竹製烟具，刻一香
以貽先人，每酒間興至，吟誦以嗟嘆之。
去今三十餘年矣，丁亥先生忌，設祭饌于門下，
既畢而內集，及日之夕，亦吉甫至，自南豐
致其家先生之書，既罷而入書房，披緘燈下
讀，曰：先伯父遺稿在家，頃者家君及門人
謀將毀之，特以告，余請先生之有一言，
再三辭不可，敢以告，余讀之三復，泣然。

泣下曰。可矣。廉卿。白首戴髮。我如其
孝思何乎。宿齋以來。悽愴有不能自己者。
不意明發不寐之夜。而又聞公初之遺稿。
有此舉矣。追懷舊日。憑几瞑坐。窓前
松竹。誦學其吟誦之聲。若有人兮。于我
簾櫳。恍兮惚兮。有影無容。不日。聽
於無聲乎。况空谷之有聲乎。遺愛
所存。感念所提。遂把筆而洩情於文字。
余之不解諧歌。廉卿所知。知而命之。
豈非以先人故邪。先人博達。風月餘情。
國雅聯俳。亦衝口出。其為公翁嗟嘆。必
當非虛觀乎爾。余則當是夜。而見昔

笑人於廉卿書上。若有受教者。然。
故題。

文政十年上巳前夕

北苑 昭陽龜井呈撰
國國

幹はた、肉を畫て骨を畫かすとは杜子美
か云し畫のみしかある。はあらう左への事と
よくよかにお、しきを以て礎とは左しぬるをや
目化翁の發句は骨気雄高実の晋子
の流垂也あけまきの若かりし世は淡々の姿
を好み物し給ひしと聞つるに今ははや
其人にもまさりぬへけれ 雜文はもと和文
ぶり出て一うてかたを左せるものから近き世の
人はふみ積つとめものうくてひたふるにたり
もて行そかし 偶世にも、てはやしぬるは
たはれたるかたみの泉として 狂歌師と

かいへるものの書たるさましたり)そは
芭蕉翁の發句の掟てもあらためぬるには
本意をかひていと口惜し此翁の書き給へる
ものは芭蕉翁のおもかけを能うつしたまへるか
今う世にはいとめつらなるこ、地し侍る大聲身
は里身に合らすといへば世人の得しらぬも
あるへけれと知る人う少きはまろくたとき
左めり 後世もし子雲あらは父是を好まし
といへる事うたかくひにや 其子雲う一人なる
陽城罷士上彦)

古鼎道人書

1 登壇

2 櫻井吏登

3 大島藤太

大伴大江

淡

① 八千馬夷相
② 八千馬夷岳

豊後後の秋風庵月化老人は日田の舞可ふ
地を忍らみ住て久しく秋風の静なるを樂ま
はせと葉の破れやうきをふらふといはれし
祖公初うこころにもか左へり俳諧は左には
の大江丸陀岳う徒にして殊に文章百十に
とめり今は十年ばかりの古かし自身をかりて
その遺稿あまた有けるを世に顯さふと
二世桃秋三世撫子等そのことをはかりけるに
光陰立やうく既に撫子世をさりければ
桃子年老て孝道を遂さることと歎かすけ
るを八千坊のあらし是に世何堪しと一集

桃秋 淡

の端に及ておのしも序者う一人にかこらるれと
又つたなく居せう徳を譽る事あたはる
美心なく他の風人に譲りて舊友のち左りに
ひとつふたつろに残ること書陰るうみ
天保壬辰初秋
蒼虬 團團

開巻 天保

天保

凡例

一 遺稿と梓の事は去る壬午の春七兄病床
 にありし時玉來より其事を申出て許容を
 受所り因て翌癸未の歲に至り兼つて玉來
 及び弗水と遺稿を拾ひ集めて玉來其跋を
 書りて其時を考行いまた補はつて弗水に
 致せり丁亥の歲に至り考行略完し因て龜井
 惟是の二先生の序を求め又兒子蓮に命して
 跋を作らしむ然とも世政紛紜として終に
 心に任せず推移りて今茲壬辰の春玉來

も又致せり故に此度之急に其事を取行ふ
 所り

一 此度と梓の事は兒子扶木保長秋雄外
 外孫孝彦國がわによかり四子も自ら其
 事を記へけりとも序跋多して觀る人の煩
 からんと慮りて止め侍りぬよつてこゝにしるす
 一 浪華一肖子に託して此に萬の事を概言り
 肖子跋あり故に此に詳にせず
 一 中遺稿は文二巻 癸向一巻 畫扶員一巻 在り
 此に先文のみを梓して癸向畫扶員は
 他白を待もつたり
 天保壬辰子丑の夏

改秋風庵二世

長春庵桃秋藏

秋風庵文集 卷之二

秋風菴目化著

秋風庵記

天明のはじめの年此日田の郡堀田といへる所に閑居の
地を占むて席を二疊をふた間にして雅客のたむけに菴を
まうく西華のちの庭を掘き、これに深山不ともうつし植
たり其中にしも櫻の花の葉かたより、お顔さし出せる
しる人めきてをかし母屋臥所厨つくり續けて又十

五題且けかりの樓其上に有てひんがしを望みり
長嘯君う待父と號たまひけむもよそならず具人
はいえまゝと其目は今も詠めて神ぬらうらし四面に
塊壁かけわたし名におへる豊後竹うちわりて覆
ふて陶瓦の代りとう玉元之か樂みは間も出さわと
價うやうきといへらむには因しむにこそあらめいまた四十
にたに満ちしてかゝるもう好み企ぬるは毎に似りなくと
方と世人の評せむを思はさるにはあらむといかにせむ
おのれと虚をなると宿疾さへむとつらうろ加はり
たよは家のこゑしひてけらんは壽を損ふへしとくろしも
いへり生ちるもうは死あるのならはし其期う來ら
むはいか、はせんてもあらさめるに思慮もて其

一冊 千五百

使中庵
定庵
大自

縮人は道にとりても久たる處有左と父母の志を
に世の塵にまみれ無事早寐を告げ晩食の四味と
かや習はれと此いと左に及へり怪る産をきくは
つねの心なれとあるに志のこころより
ましも好みぬは左に及へりつねの心なれとあるに志のこころより
成して樂み興せしめつしか独はたうしませしとや
よりすき者文かよはして親めるか多かる中にも
庵の三世左空上庵居士よりあかくと日はつた
くもとあるにすき一むうあしうへる芭蕉の公初
自畫替一軸はた其句にたりていほりにも多ほうし
きせて秋風と吟まほしと庵の記綴りて添て贈ら
まのうかは公初肖像一銀頭巾めして膝にたす

置たまへるたけ三寸ばかりなるを親弟杉屋の
こつから刻めたる物として是も居士よりめくまわつ又
駿河路や白田の驛なる塚本如舟めしは公初と
交り浅からずかかあり遊歴の折々此人を訪ねて
宗長庵に杖を留め隙を慰めしとや彼花桶
茶の香ひとの口をさびもこの比の事左らんかし其
さいに愛敬の茶碗ありしか塚本のまこなる
の家には置るを東武の杉浦蘆角老人それ
に旧友の因みありて譲りなつて老人は又アアに
風流の縁有て送りて贈りぬこもかひなしといふへき
制衣左からいかにも鹿造りこよにつけても翁平生の
清素の程おもひやうぬ是等の物は此道と執

ちる人にとりてはたはやく得かたきくさくになら
ずかたよくなる求すしかく集れん是や幸か
こほれたる左もらましせいほりの景勝は雲中う峰
につはら左は救済せうはしめよりう友にして生涯を
終人の素意左りしかるに小人う閑居 饒見東左
もおもほゆは有左りの智を出してた、不善者左
さしとの一事うみいたらぬまても中り活はやと心に
折まぬ此外に願ひも左く均まをしこうき世う事
は世まかに死んまては生る左る(し)

しら川の行脚も淋せて庵の秋

月化句抄

蠅まてか外に求めううりう皮

聖もある日とあまほるか蟬う聲

打水に横う夕暮者しと十ケリ

月う顔都に雲も左くもかな

得めまても釜と堀田や年う民

生れしもあるに木うの花うとし

いくさうりありとほきけと月の中

親ひより我身も欠て月悲し

目う露もちりぬ花野の灰の中

陸奥や限しうて人も秋も

像成る枯木に魂は帰リ花

かく小家に杖の年玉世負ひけり
 妻をらうてさひぬ鹿毛の筆のぬし
 もろ花のふし野つくらむ我田にて
 分し葉のなしとおほさむ秋の月
 書畫にて見は人も百とほと杜若
 ちひさうに似たるあやめは左かりけり
 梅に描さくらに捨る命か左
 了つるとは詞の華の命か左
 道原に似せぬと竹筆の宜々て哉
 霜の白とおもへは涼しはくちら
 あめ系路の外にも天のこんつか左
 朝顔の花見は昆布の山椒哉

涅槃会や細く鳴はとう鳥そ
 仰向いて見ること雁はふかりけり
 垢根をる鶴の雛に二月の朝目か左
 ふつと見て悲し霜夜うの鶴三羽
 真徳の七ツ目出たや花の牛
 夜嵐や明て木下の蝸牛
 名目の雪ころはしや不盡う山
 君に問んたりはしほしりとへ事
 月には招き蚊は追つ拂ふうち哉
 はしと見えよ何か喰たお月さま
 月ひとつ生死の海の外をゆり
 世評のふたひ生へよ目田の水

駝岳発句集叙

都に日誰難波には深平と上功寧翁の
 高弟あまた机を並し人々もいつしか蹟を絶
 せし中にひとり駝岳老人のみそが三世を嗣
 きて左から流義の一隅を守らるる風調よく
 世と共に推移りて交りたかく其傳燈
 を掲げ來りては却て祖を息に協へりといふへし
 いにし乙亥に五竹庵に叔を承してより
 道統附囑のぬし八千坊あり師の生涯の句を
 撰みて一集を編て七とせう追慕と乞とや是また
 よく継ぎよく述るの任にしもあたりといはせし
 るるか旧識たるもて序の需ありそよふ四十余年

年之因之在江七十五歲之皤年之筆了
文政辛巳三月

跋
印

秋風草堂發句集二卷當伯考中年實政丙辰之
歲。曰人金弗水即進而刻之。此編為其後集能
句一卷。俳文二卷。今茲文政丁亥。家君與弗水交
藤君來輯之。而上於梓。實伯考歿之六年也。而
辰之極。今已不存。蓋伯考不以俳事名。梓
行之事。非其素志。刻既成。存諸書肆。無復
所問。終至於失七。極可惜也。然伯考俳句。中年
以後。頗上斐風格。識者稱其老而益進。此篇
所收。始而辰。終辛巳。凡三十餘年。則前之所七
亦不甚惜。至俳文成集。自古桃李田其面諸老。

而及近時，不過五六家，殊可珍也。嗚呼，古之
立言者，必有子弟門人，編集之，考訂之，
又隨而鼓吹羽翼之，而後始得傳於遠
也。伯考無子，視不肯建，緇子，然建也。
以儒為業，不暇學俳，故當其生時，
不能負荷其道，歿後亦不能助我父以
任，編集考訂之勞，其謂之何哉？若金
滕子，所謂不負本已，夫伯考之名，噪於
俳林久矣，但隱居放言，不趨時好，故與都下
執牛耳者，不必相合，而年少後進，務出
新意，排擠前輩，以不勝，則恐此編復踏
丙辰之轍也。伏願世之君子，辱在伯

考門者，當自相識者，不相識而相慕者，素
不相慕，讀此編而喜之者，相與鼓吹羽
翼，而傳之於數百年之外矣。元運巡環，
無往不復，世道一變，則鄉所以為俚，今以
為雅，彼所以為陳，此以為新，此編雖
依於前，必昂於後矣。安知其與桃青
其角諸老之言並立乎？嗚呼，家君老矣，
建也不肖，此編之存亡，運塞，將在象君子
故我不自覺我言之曉夕焉。云一爾。

姪 建 拜書
印 印

一とせせ野山ふみして旧き跡を尋ね探り西河に
出ぬこころは家々に紙漉こととたつきとせり世に取は
やううた小杉左るへしかかろいみしきものを畧人のう
に任出せる事よと友なる人の岐きけるかあるしう
自にや入けむほ、笑ていふ楮木の製衣は手ぬみ
余りを経て始て紙と成侍る其極品に至ては
蜻蛉大漉のけに晒了事倍せりと其人多脚
を帯てろるのふかき、實に感了へしこゝに月化師
の文集と木のあらをいと余に託せられたるに成り
鳴吟師が文章は経甲乙人の業にも猶勝るるか
蓋其精神墳典の源流に溯り子史の溝梁不

と探り或は源語萬葉の深淵を究り日を續
月を重めて漉出せる若竹一と真無瑕の玉と
謂へし今吾翁の道天下にあふる、もうから
国として誹謗にあらずるはよく翁としてはいかに
にあらざるはなし、こゝには此書目と紐とく者師が
清原の水よりも淡きしきをしらさらん余故国に
有しむかし教示をさへ蒙りしこものあらはれは
殊に春躰に絶へず大江の岸に墨をとり
西河紙の清らなるを撰心敢て此事を題了
といふ

天保四癸巳榮う日 一肖 梁人 一画

鸚鵡程よくもついでとも禽獸をば斥けし
 せん人として禮なきはよくもついでとも禽獸に
 等しからず余性僻にして風雅をこころいさめと
 その好む風雅によく物いふ事あらはるよつて
 いにし文化庚午つとし自愧にたえかたく夫師
 にたよりて四時つりてめを以て心む向さる教
 華に推し目に敲けとも希塵ノ身にまといひて
 ふるに研究を遂るた、我^今齒^今の富るをたつ
 師の老のかすたるもしらすとせあそりつとし
 月うつりこしおこなり夢多のこころに人侍りし
 さるを師を年の又、かりのいたつきに臥給ひぬ

ねと平性によりく瀨野がたをみ給へはかう
 膏七目にやとりし類心にはあらうといさめまいらせ
 けへるもわりたしや又ある時はいたみおこたりて
 流^流のうらけしき日も多かたと夫の浪の上を来
 りてあら玉の年たうかへりた、おとろへさせ給へ
 は医師のこころをこらせとも草根木皮うちから
 かひなく祝祭が幣の丹誠もしるしを見ろ
 睦月の暗にやちりけささうしのかたうち見や
 りて哀れにも山う端ちかし日影かたふきぬ
 今に世雉より雨給ともき、ま左まとう給ふを
 家の子はいふも更なり何果果くわかしまて
 治人命のまう葉をちとす、め慰め奉るに

左んヤノと九泉の路と、まらせ給ふへうも
あらさめやは余おもふに師の風流よま
とし月を經てくちうさみ給へる發句は白雀木はた
鉢紫題林あり或は聯句においても諸集より
少左からうた、文章草の堆かうしてわきて大なり
薄ホあると空しく蝶のちみかと左ん事の本ま
左んは世に弘め人事を願ふに富言の起事
用なしとゆさし給はぬと扶木さる(感)と共にわかひ
ぬるこころせちたりとやおほしけむ三人おこなへは
かならうよき師ありと繼に決ゆるしの詞を終の
名残とし白楊のあるしと左んさせたまふか左んみは
たとふへくもあらう物ふさがるはかりに左ん彼鶴林

のあかしもこのにおもひ合さすていはんかた左んしかく
と扶養のニ子をかたらひ草稿を拾ひ二巻に
綴り梓人に託しめしかあやと先に五老井か文
選東華坊か文鑑その餘の撰集又あかり
さかと門葉のん々うために師の記念にももの
せんにはこやにまをるはあらしかくいへほとて葵さる
串水の高き多とさしをきみたりにも錐を帯り
は鳴呼かましきわさ左めんとあ左かてまもをかさり
氣を成人にはあらうおうれ風雅の外生理の事
まさへ示教せられし因み深きをもて志を述
ていさ、かよ追慕のたために糸白を捻り禮を
なして金剛獸に別左る事をわかふのみ

又4
6899
13

文政癸卯秋

門人

宜春亭玉來述

友人朗都書

天保二年庚子年九月

豐後日田

秋風庵藏板

心齋橋久太郎町

浪花書房 塩屋忠兵衛

